

南極OB会 会報

No. 12

発行 南極OB会
会長 川口貞男
編集 広報委員会

目

- 口絵写真 わらび座の白瀬轟物語・・・1
- 白瀬隊100周年記念事業スタート・・・2
- 開南丸出航100周年記念とイベント
- 100周年記念東京講演会のお知らせ
- 第52次隊南極観測隊壮行会開催・・・4
- 第6回講話会・・・5
- 「画像で見る南極探検50年・100年」
- 「南極OB会のアーカイブ事業について」
- 「写真で綴る宗谷時代の南極観測」
- 「超高層物理観測の歴史」
- 南極関連情報・・・7
- ・「しらせ」2度目の氷海へ
- 南極関連施設・記念碑などの紹介・・・8
- ・西堀榮三郎記念探検の殿堂 角川咲江

次

- ・西堀記念館で「マイナス25度の食事会」開催
鈴木大輔
- 連載「支部便り」⑧・・・10
- ・北陸支部報告
- ・北海道支部からのお知らせ
- 講演会とフェスティバル
- 連載「帰国後の各隊の動き」・・・13
- ・27次隊帰国後の活動報告
- 新刊紹介・・・15
- ・池田まき子著
- 白瀬中尉南極探検物語「まぼろしの大陸へ」
- 会員の広場・・・15
- ・受賞、訃報
- 広報委員会からのお知らせ・・・16
- 巻末写真 52次隊の壮行会の様子・16



劇団わらび座による白瀬中尉物語 PR ショートステージ公演の一場面

白瀬隊100周年記念事業スタート

ノルウェーのアムンゼンと英国のスコットが激烈な南極点一番乗り競争を展開した1911～12年に、日本からも白瀬南極観測隊が南極点を目指して南極に向かったことは、世界の探検史上に残る快挙として、私たち日本人の誇りです。

その白瀬探検隊100周年を記念するさまざまな催しが、今年から来年にかけて全国各地で開かれます。その先駆けともいえるべき行事として、2010年11月28日、「開南丸」の出航した東京・芝浦港近くの芝浦埠頭公園でまず「出航100周年記念式典」が、次いで芝浦港南区民センターで「100周年記念イベント」が行われました。この式典およびイベントに関する報告は以下の通りです。

さらに2011年3月19日には東京・神田の一ツ橋記念講堂で「100周年記念講演会」が予定されており、2012年には国際シンポジウムなども企画されています。

100年前の日本に、はるか南極にまで歩を進めた日本人がいたのだという事実に思いをいたすと同時に、今日の南極観測事業につながる原点を切り拓いた先駆者の偉業をしのびたいと思います。

白瀬日本南極探検隊

開南丸芝浦出航100周年記念式典および

記念イベントの開催についての報告

白瀬日本南極探検隊100周年記念事業推進事務局次長

山木 将弘(秋田県)

開南丸芝浦出航100周年を迎えるにあたり、「白瀬日本南極探検隊100周年記念プロジェクト実行委員会（委員長：井上正鉄南極OB会秋田支部長）」と港区民有志による「芝浦港南地区・南極探検隊100周年記念事業実行委員会」、「港区」の共催により、東京・芝浦（港区）で11月27日（土）にプレ・イベント、11月28日（日）に記念式典及び記念イベントなどが行われました。

1) 記念式典

開南丸出航の地である「港区立埠頭公園」において、探検隊の子孫50余名のほか、文部科学省、秋田県知事、南極OB会など来賓約200名の方々が参列し、記念式典が行われました。式典では、開南丸出航地を代表して武井雅昭港区長の挨拶、

来賓である文部科学省研究開発局海洋地球課の堀内義規課長、佐竹敬久秋田県知事の祝辞をいただくとともに、白瀬矗の出身地、にかほ市の「鳥海山にブナを植える会」より提供された鳥海山のブナの苗木の植樹などが行われ、出航100周年を祝いました。

2) 芝浦出航100周年記念イベント

①ライブパフォーマンス「“いざ南極へ！”100年くらべ～白瀬探検隊と今の観測隊～」

この日のために結成した南極観測隊に従事した有志5名により、100年前の白瀬日本南極探検隊と現在の南極観測隊の装備や食べ物の違いなど、笑いあり、驚きありのパフォーマンスを行いました。

②南極昭和基地から生中継！（ＴＶ交信）

第５１次南極観測越冬隊の工藤隊長をはじめ、隊員とのＴＶ交信を行い、中継ではブリザードの様子レポート、南極クイズなどが行われ、軽妙な受け答えに会場が沸きました。

③基調講演「白瀬南極探検１００年」

南極ＯＢ会の小野延雄氏（国立極地研究所名誉教授）が、「白瀬南極探検１００年」と題して、白瀬日本南極探検隊から現在の南極観測隊までを当時の貴重な資料を交え講演しました。

④劇団わらび座による白瀬中尉物語 ＰＲショートステージ

白瀬隊の子孫や関係者が見守る中「白瀬中尉物語 ＰＲショートステージ」の公演が行われました。白瀬隊の子孫や関係者の方々からは、非常に感動したとの声も多く、公演後、多数の方が、わらび座の役者さん

と記念撮影をしていました。



わらび座の白瀬中尉物語公演の一シーン

※記念イベントの様子は、本実行委員会のホームページで動画を視聴できます。

白瀬１００周年ホームページは

http://www.shirase100.jp/event2_100.html

です。

白瀬南極探検１００周年記念東京講演会のお知らせ

白瀬 轟による南極探検から、今年から来年にかけては１００周年目を迎えることは周知の通りです。これを記念して南極ＯＢ会白瀬探検隊１００周年記念事業委員会では日本極地研究振興会、白瀬日本南極探検隊１００周年記念事業委員会、白瀬南極探検隊記念館などとの共催で下記のような講演会やイベントを予定しております。皆様の絶大な支援をお願いいたします。

２０１１年度東京講演会

開催時期

２０１１年３月１９日（土）１３００～１７００

開催場所

一橋記念講堂（学術総合センター）

講演会および展示会（講演会当日のみ）

講師および演題

小野延雄（南極ＯＢ会）

「白瀬南極探検隊の足跡」

小坂あやの（松本楼）

「梅谷庄吉と白瀬南極探検（仮）」

柴田鉄治（南極ＯＢ会）

「白瀬隊から現在の南極へ」

映像

日本最初のドキュメンタリー記録映像

「白瀬南極探検隊」

また、２０１２年度は国際講演会

開催時期

２０１２年２月２５日（土）～２６日（日）

開催場所

一橋講堂（学術総合センター）

講演会、史料展示会（講演会当日～翌日）

講演会演題

「２０世紀初頭、南極英雄時代の探検と白瀬南極探検隊（仮）」

講師：スコット隊の内陸探検

アムンゼン隊の内陸探検

ベルギー隊、ベルジカ号の越冬

アジア人から見た白瀬探検隊

白瀬南極探検隊（日本人講師）

の関係機関から外国人講師をお呼びして実施することを企画いたしております。

その他に、映像「白瀬南極探検隊から JARE

へ」の作成も検討中です。

また、南極OB会地方支部でも白瀬・南極探検隊に関係する方々を取り上げて、それぞれ講演会などを開催する予定にしております。なお、その皮切りとして北陸支部で

は2010年11月27日に石川県羽咋市で開南丸の船長であった野村直吉を取り上げて「野村直吉という男」という講演会とパネルディスカッションを開催しました。



5 2次隊壮行会開催

南極OB会主催の壮行会が、2010年11月5日（金）夕方から、東京・文京区湯島の東京ガーデンパレスで行われた。それに先立ったアトラクションとして、「画像で見る南極探検100年」の上映があった。



山内隊長の出発挨拶

第52次隊は、山内恭（ヤマノウチ・タシ）隊長以下越冬隊30名、夏隊33名、同行者28名という編成。

壮行会は広報の手塚正一さんを司会に、国分征OB会副会長の開会の挨拶で始まり、長老楠宏さんの乾杯の発声で懇親会に入った。

山内隊長の挨拶によると、隊員の年齢が高くなっているとのこと。また52次は第8期6カ年計画の初年度にあたり、地球温暖化を南極から観測することに重点がある。

そのため大型気象レーダーPANSY（パンスー）の建設と運用という大きな任務を担っている。

隊員4名と同行者1名は、同月11日に東京港を出港した「しらせ」で出発、観測隊の本隊は同月24日成田空港からオーストラリアのフリマントルへ出発した。同港で「しらせ」に乗船、30日に南極へ向け出港した。

また船上観測は、従来の「しらせ」の氷海航行中の観測のほか、専用観測船「海鷹丸」による観測を実施している。内陸調査はドームふじへの調査旅行も重点項目の一つとして実施する。

PANSY計画は、北極などの観測機とも連携し、地球規模での気象・気候の変化を調査・研究するのが目的で、国立極地研究所や東大、京大など9大学と8研究所が参加する。直径160mの敷地内に高さ3mほどの小型アンテナを1045本立てる。地上から高度500kmまでの大気の流れを1分ごとに観測する。3月ごろから部分運用したいとしている。



第52次南極地域観測隊の壮行会のスナップ



第6回「南極の歴史」講話会

「画像で見る南極探検50年・100年」

—小野延雄、大瀬正美、国分征氏が講演—

第6回歴史講話会が2010年12月4日（土）、東京・神田駿河台の日大理工学部1号館で開かれた。

まず、南極OB会アーカイブ委員長の小野延雄氏から「南極OB会のアーカイブ事業について」と題した講演があり、国際地球観測年（IGY）参加に始まる日本の観測隊の歴史を次世代に残すことを目的として、アーカイブ委員会が行っている資料の収集方針について語った。



講演中の小野延雄氏

小野氏によると、隊次別資料はそれぞれの隊次幹事が対応し、隊次を超える観測事業資料とOB会会員の物故者遺族からの寄贈資料は一括して委員会が対応し、記録史料・映像資料・現物小物などの取捨整理作業を行っている。最終保管場所は国立極地研究所とすることで、極地研アーカイブス室と協議しているという。

記録史料の一例として、日本の観測隊発足のころの新聞や雑誌のページが紹介された。また、映像資料には解説文が有用であり、当時を知るOBたちのコメントが必要ながことが述べられた。

次いで、第一次観測隊員であり、初代の昭和基地郵便局長でもあった大瀬正美氏が、「写真で綴る『宗谷時代』の南極観測」と題して講演し、数々の写真を披露した。

大瀬正美さんは、南極で撮影したおびただしい数の写真の中から、宗谷時代のモノクロ写真40余枚を紹介した。永田隊長、松本船長、村山越冬隊長など宗谷時代の懐かしい方々が登場し、暴風圏、初の氷海、基地建設、タロ、ジロなど、南極観測黎明期の写真を紹介した。彼のフィルムは、貴重な財産として引き継がれるであろうと、確信した。



講演中の大瀬正美氏

大瀬さんは86歳、1s、2s、3s、4w、7s、8w、12w、19s（sは夏隊、wは越冬）と8回昭和基地に行き、うち3回越冬というベテラン隊員である。更に南極半島への観光船のガイドを勤め、現在の南極にも通じている。

私は3次、7次で一緒した。彼のことは「大瀬さん」とは呼ばない。愛称は「半五郎さん」。有名な清水一家の大瀬半五郎からである。彼は電波研からの隊員だが、ここぞというところでは、必ずカメラ持参で細身の体を現わした。そして船内に暗室を

持っていた。

当時はモノクロフィルム中心で、カラーはコダクローム、さくらなどのネガが出始めていた。自分で現像して焼付け、通信室の電送機のドラムに巻き付け、通信士にお願いして発信する。電離層の反射を利用する時代で、電送は1週間に1日だけ、しかも短い時間に限られていた。電離層の機嫌が悪い時は、着信の画面は筋だらけだった。

こういう時代だったから、大瀬さんの存在は助かった。蜃気楼を撮る時、「シャッターと絞り、いくつ？」と聞けるのだ。暗室に私の現像タンクを置かせてもらった。何より助かったのは、報道カメラマンもやってくれた事だ。この写真を見てください。



大瀬さん撮影 西田、沢、深瀬氏が橇を曳く図

昭和34年1月18日、文部省と海上保安庁が、報道各社に配った写真。発信位置は南緯 $67^{\circ}43'$ 、東経 $39^{\circ}56'$ 、(タロ、ジロ発見の4日後)。写真説明は「へりポートまで犬ぞりを使って物資を運ぶ、右から西田、沢、深瀬隊員(大瀬隊員撮影)」となっている。報道隊員の私が働き、大瀬さんが撮影している。

この写真は全国各紙に大きく載った。「あいつ、犬の代わりやってんだ」とか、「かわいそうに、人間が橇を曳くのね」とか、帰国したら、「一時期話題になったよ」と同僚から知らされた。

大瀬さんの記録写真は、公私共に貴重な資料である。(深瀬和巳記)

最後に、南極OB会副会長の国分征氏が「超高層物理(オーロラ)観測の歴史」と題して講演し、昭和基地からロケットを打ち上げて、直接オーロラを観測した初期の時代の歴史を中心に、オーロラ観測の概要とその成

果を語った。



講演中の国分 征氏

国際地球観測年(IGY)の11の観測項目、気象、地磁気、オーロラ、大気光、電離層、太陽活動、宇宙線、緯度・経度、氷河、海洋、地震、重力、大気放射能のうち、超高層物理関連の項目が7つを占めていた。また、昭和基地は、極光帯直下に位置することが予測されていたこともあり、初期の段階から超高層物理観測は、重点的な研究観測であった。IGY観測に備えた観測機器の持ち込みは、2次隊越冬断念のためIGY期間には間に合わず、3次隊から始まった。3次隊では、全天カメラ、分光計、直視磁力計、イオノゾンデなどが設置され、オーロラの分類、出現頻度、極光帯の位置、オーロラスペクトル、地磁気変動の観測が行われ、地磁気擾乱、天頂オーロラ光度とスボラディクEの相互関係や氷冠雪氷の電波伝搬特性など、先駆的な研究成果につながった。

砕氷船「ふじ」の就航と恒久化を目指した昭和基地再開(7次)と8次の観測棟の新設などの基地整備にともない、全天カメラ、分光器、多色フォトメーター、オーロラレーダー、リオメーター、地磁気短周期変動($2\text{ mHz} \sim 5\text{ Hz}$)、自然電波観測($300\text{ Hz} \sim 20\text{ kHz}$)(7次)、子午線掃天フォトメーター、自然電波の偏波・到来方向観測(8次)などが導入され、主な超高層観測が整ってきた。9次以降の「しらせ」就航までの主な観測をあげれば、9次：気球観測(オーロラX線)、11次：プロトンオーロラ観測掃天フォトメーター、12次：オーロラ観測超高感度テレビカメラの導入、17次：衛星観測地上局、18次：無人多点観測、19次：

VLF 電波方向探知（3 点観測）などがある。このような観測の中から、プロトンオーロラの出現形態、オーロラ動態や VLF 放射に関するユニークな研究成果が公表されている。

国際共同観測としては、1977、1978 年にフランスとの共同により、GEOS-I 衛星（静止衛星軌道投入失敗）に呼応したアイスランドー昭和基地共役点観測が実施された。その後、1983 年にアイスランドに観測点（3 カ所）を設置し、以後、継続的に共役点観測が行われている。

南極地域におけるロケット実験は、フランスも実施したが、越冬中に実験を行ったのは我が国だけである。昭和基地でロケット実験を行うという構想は、1963 年頃から検討されていたらしい。具体的な検討は、1967 年頃から始まり、ロケット基地施設の建設は、10 次から行われた。11 次では発射台、ランチャー、レーダー設備などの飛翔体実験に必要な施設が整備され、S160JA2 機を試射した。以後次の 3 期にわたり、越冬ロケット実験が行われた。第 1 期：12－14 次（1971－73）、第 2 期：17－19 次（国際磁気圏観測計画：1976－78）。この期間の

打ち上げ数は、S160JA4 機、S210JA31 機、S310JA7 機である。第 3 期：25－26 次（1984－85）には、S310JA5 機 MT135JA11 機が打ち上げられ、MT135JA の 5 連射実験も行われた。オーロラ発光層の直接観測は、S310 により実現された。

「しらせ」就航以後（25 次～）は、衛星観測用大型アンテナなど施設の大型化も可能になり、それとともに点から面への観測の展開が計られるようになった。南極周回気球（ポーラーパトロールバルーン（PPB））実験は、南極地域の夏期に安定して吹く東風を利用して大型の気球を南極大陸に沿って周回させ、宇宙線、オーロラ X 線、磁場、電場、オゾンなどを、広域、長時間にわたって観測しようとするもので、周回観測に成功している。大型短波レーダー観測は、短波帯電波を電離層に向けて発射し、その干渉性後方散乱エコーのドップラースペクトルから 極域電離層プラズマ対流を広範囲（射程約 3600km 角度 53 度）にわたり測定する。これは 1995 年から始まった南北両極域全体にわたる国際共同観測 ネットワーク SuperDARN の一環で、現在も続けられている。（国分 征記）



南極関連情報

「しらせ」2 度目の氷海へ

2 度目の南極行となる「しらせ」は 1 月 11 日に、東京港晴海埠頭を出港した。艦長が交代し、乗組員は中藤琢雄新艦長（52）以下 179 名。1 月 23 日に昭和基地に 1 番機を飛ばして新鮮な食料や手

紙などを越冬隊員に届け、現地時間 1 月 31 日午後 11 時 20 分、日本時間 1 月 1 日午前 5 時 20 分、昭和基地に接岸、新年早々から PANSY 計画建設作業などを開始した。





南極関連施設・記念碑等の紹介

西堀榮三郎記念探検の殿堂

学芸員 角川咲江

平成6年8月、近畿圏と中部圏のほぼ中央、琵琶湖の東部に広がる湖東平野に位置する9千人余の湖東町（現在は東近江市）に、西堀榮三郎記念探検の殿堂（以下、「探検の殿堂」）は開館しました。



西堀榮三郎記念探検の殿堂

聖徳太子伝説が残る「馬堤溜」（百済寺への途中、馬の蹄を洗った溜池）の一角に建てられた施設は、まるで海に浮かぶ氷山のように見え、昔から近江米の産地として農業が中心だった地域の景色には、少々異質とも、西堀榮三郎の破天荒な性格をあらわすユニークな建物だとも言われています。

この地をルーツとし、近江商人として成功した西堀家の五人兄弟姉妹の末子として生まれた榮三郎は、11歳の時、京都・南座で開かれた白瀬中尉の南極探検の話聞いて以来、事あるごとに南極情報を収集し、冬山登山に励み、南極への夢を育み続けました。京大の講師時代、親友・今西錦司の妹である美保子と結婚した際には、新婚旅行は南極へ行こうと、捕鯨船に直談判したが断られたというエピソードも残っています。



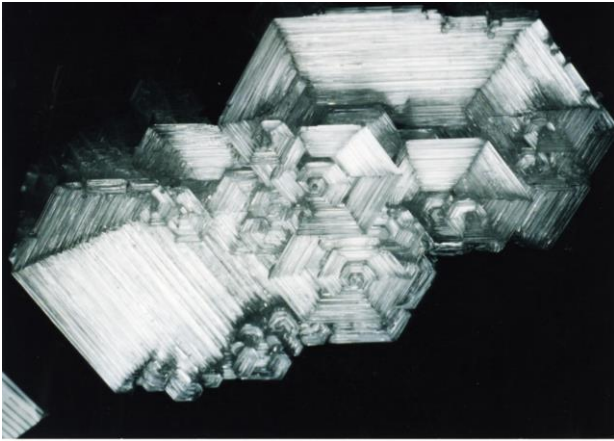
在りし日の西堀榮三郎氏

南極という未知の白い大陸に対して大いなるロマンを抱き続け、ついには第一次南極観測で越冬隊長を務めた西堀榮三郎について紹介するにあたり採用されたのが、マイナス25℃の南極と昭和基地の主屋棟を再現し、寒さの中でペンギンやオーロラ等、南極の映像を見たり、ブリザードを体験してもらうという展示でした。

目玉展示として人気の高かった「南極体験ゾーン」は、老若男女を問わず、多くの方に楽しんでいただきましたが、冷凍機や映像・音響設備の老朽化に伴い、平成22年10月末で残念ながら休止（事実上、廃止）となりました。

昨今の社会状況では、地方自治体の財政状況も芳しくなく、文化施設への再投資は難しいのか、リニューアルの予算がつかないままの休止となりました。そのため、探検の殿堂は、新たな方向を模索しているところです。

ところで、南極を疑似体験できるマイナス25℃の展示室は、面白い副産物を生み出しました。そのひとつは「巨大霜結晶」です。



見つけた霜の巨大結晶

霜結晶が見つかったのは平成10年5月、まるで花が咲いたようにいくつもの六角形が機械室へと通じる小部屋の天井を覆い尽くしていました。雪や氷については全くの素人だった私には、初めそれが霜とはわからず、ただ綺麗だと眺めているだけでしたが、その後、地元・滋賀県立大学の学生による継続した調査・研究となり、探検の殿堂が初めて“科学”的な研究テーマを持つきっかけをつくりました。そして、雪や氷に関する研究活動（赤雪やゆきむし等）が増え、学校への出前、科学イベントへの出展へと広がり、規模は小さいけれど科学博物館というイメージが定着していきました。子どもたちへの様々な体験活動の提供が地元のニーズであるとわかった平成12年以降、マイナス25℃では、凍雨やダイヤモンドダスト（雪を降らせる）をはじめとするいろいろな実験が行われ、それらのメニューは学校団体を中心に利用されました。また、自律型ロボット（南極探査ロボット）の活動をしている子どもたちや、南極・北

極フォーラムに応募する子どもたちに実験会場として提供するなど、展示以外での利用が促進されました。しかしながらマイナス25℃の「南極体験」があったからこそ、多くの発見があり、沢山の人の支えられ、新しいことに挑戦する中で成果（職員のスキルアップを含む）が得られたのだと思っています。



「探検の殿堂」へのアクセス

時代の流れには逆らえませんが、今後とも西堀先生の意志を継いで、微力ながら地域の科学の殿堂としての価値を高めてゆきたいと思っています。もし、お金の掛からない何か良い企画がありましたらご意をお寄せいただくかご提案下さい。頑張っていますので一度足をお運び下さい。

（最後は「南極体験 FINAL!」と称して、近江牛を焼いて食べるイベントで締めくくった。関連記事は以下にあります）。

西堀記念館で「マイナス 25 度の南極食事会」開く

鈴木大輔（大阪市立大学都市研究プラザ）

「西堀榮三郎記念 探検の殿堂」で10月30日（土）「マイナス25度の南極食事会」が開かれた。記念館の一角に、南極の寒さを体験できる「南極体験ゾーン」があり、それが冷凍機の老朽化に伴い休止されるため、最後

に企画されたイベントである。

集まった「探検家」は総勢134人。マイナス25度という非日常的な空間では3台の内1台とIHのコンロが可動しなかった。急遽、プランを変更した。

イベントはまず、調理担当隊員として越冬した経験のある五味貞介氏（現・くつろぎどころ五峯庵料理長）の講演でスタート。講演の後、みんな備え付けの防寒服に身を包み、いよいよ南極体験ゾーンへ。

中はまず細くゆるやかなスロープになっており、その氷の壁面には「福重明子写真展」、ノルウェーの北極圏を撮影した写真が展示されている。南極で北極の写真を見るという試みだ。

さらに奥に進むと、三匹の皇帝ペンギン（模型）が歓迎してくれ、そこから先はお食事会の会場になっている。すでに辺りは近江牛の焼肉の煙と香りで包まれている。

早速、お皿に野菜と共に盛られた焼肉を手に取り、食べてみる。飲み込むと、体温が少し上昇したような感じがする。食事することに、これほど体が反応した経験はないかもしれない。「食事」と「生きる」の繋がりを感じた瞬間だ。

添えられていた野菜はカチカチに凍り、とても食べられたものではない。自宅の冷凍庫より寒いのだから当たり前かと、納得するが、あらためて極地の厳しさを痛感した。

焼肉の会場から次の部屋に移る。そこは昭和基地を再現した作りになっており、マイナス5度くらいなのだが、自然と「暖かい」という言葉がでる。そこで、温かいペミカンのスープを飲み、「南極お食事会」は終了となった。

会場の外には五味貞介氏や西堀榮三郎氏の三男、峯夫氏も待機して、体験が終わった参加者たちと懇談した。このイベントに参加した未来の探検家たちは、一様に目を輝かせ、晴れやかな顔をしていた。極地での食事を体験するという事は、思っていたより遥かに大きな収穫を与えてくれたように思う。この中から未知の領域にチャレンジする探検家が生まれることを願っている。



連載 支部便り⑧（北陸支部）

南極 OB 会北陸支部企画

「白瀬南極探検 100 周年記念事業：開南丸を操った男」 の実施報告

岩坂泰信（24W、金沢大学フロンティアサイエンス機構）

はじめに

南極OB会北陸支部の本年度の行事として「白瀬南極探検100周年記念事業：開南丸を操った男」企画が持ち上がったのは、支部総会（2010年8月2日）の席上であった。南極OB会の呼び掛けに応じて白瀬 轟南極探検100周年事業に対応した地元企画として、羽咋市出身の野村直吉をハイライトし、あわせていろいろなものを盛り込もうというわけである。例年より相当おそい時期（例年は6月－7月）の開催になったものの、暑さのおかげ（理由は以下に）で極めてスピーディにことは進んだ。

南極OB会北陸支部企画：支部の総会では、会計報告が済むとその後の議題や報告はビールをいただきながら進めることが多い。異常な暑さを迎えた今年の夏は例年以上にビールのおかわりが進み、出席者全員は早い時間帯から出来上がって高揚した気分が

支部総会を包んでいた。支部長提案の企画「この地の出身者である野村直吉を通して、南極に関心を寄せる者たちが、探検、地域の活力、世界の中の日本などを考え、提言する。このために、野村直吉をテーマにした講演会と討論会を支部の企画として実施

する」は、支部メンバーの熱気にあおられ一気に可決し出席者全員を実行委員とする具体案の検討に入った。とはいうものの、これまで野村直吉や開南丸という言葉すら初めてというメンバーも居たのではある。野村直吉は、100年前に、白瀬 轟南極探検隊を運んだ開南丸の船長として記憶されている人物である。

その野村船長の生誕の地とされる羽咋は、ご多分にもれず、地方都市特有の様々な問題を抱えている。「地方都市の活性化を考える上でも、野村船長を取り上げる価値が大いにありそうである」と言うのが支部メンバーの等しく抱いた理解であった。

意見交換の上、企画は、

- 1) 講演会とパネル討論会の組み合わせとし半日程度の規模を想定、
 - 2) 一般の人を対象にわかりやすいものにする、
 - 3) 出来るならば野村直吉の出身地である羽咋市で開催、
- などが決まった。さらにこれに続く企画として「野村直吉研究会を立ち上げたらどうか？」と言う声も上がったが、こちらの企画は「講演会とパネル討論会の推移を見て」ということになった。

野村直吉をめぐる講演会と討論会の開催に向けて：南極OB会北陸支部総会の決定を受け、企画案の詳細を作り上げると同時に、岩坂泰信氏、川田邦夫氏、當房 豊氏の3名が早々に現地に足を運んだ。窓口になってもらった羽咋市歴史民俗資料館の若狭康子氏を訪れ地元関係者と面談を行った。

席上、我々が提案した11月27日(土)の開催日時が、羽咋市の公民館研究集会が開催される予定日と重なることや、当日はこのために羽咋市唯一の集会機能を持つ施設であるコスモアイル羽咋の使用不能の可能性もあることがわり、一時は企画実現に暗雲が垂れこめた。しかし、羽咋市の関係組織の好意と努力で、公民館研究集会の一環として北陸支部企画を繰りこむというところに落ち着き、北陸支部企画案のコンセプトを100%生かした状態で企画を実現できるめどが立った。

ちなみに、会場となったコスモアイルは、羽咋市が日本でもっとも頻繁にUFOが見られる場所であることを宣伝文句に運用さ

れている。真偽のほどを議論することは、筆者にとっては出来かねる仕事であるが、施設は大変立派なものであり我々の企画を行うには持ってこいの広さや機能を持った施設であった。

白瀬南極探検100周年記念事業としての講演会「開南丸を操った男」が開かれた。

2010年11月27日(土)、コスモアイル羽咋の会場で、13時30分より羽咋市公民館研究集会がはじまり、例年通りのスタイルで公民館活動に貢献のあった皆さんの表彰や活動の指導者たちの演説が行われた。その後短い休憩をはさんで、北陸支部企画が14時40分から始まった。

「白瀬南極探検100周年記念事業：開南丸を操った男」企画は、地元羽咋市では『元南極観測隊員達が語る「野村直吉」記念講演と公民館研究集会』として広く地元宣伝していた。このおかげもあってか、前半の公民館研究集会の活動事例研究が終わった後にも関わらず、会場には次々に人が入っており、地元紙は180人の皆さんが集まったと伝えていた。

我が企画は、尾崎光紀の総合司会のもとで進められた。会の冒頭に岩坂泰信が北陸支部を代表してあいさつし、つづいて、白瀬 轟南極探検100周年記念事業を推進している立場から南極OB会副会長の松原廣司が挨拶した。

その後、大賀清史氏(郷土史研究家、半田市在住)が「野村直吉船長の偉大なる航海術」と題した講演を行い、講演に対して岩坂泰信と香川博之が北前船ネットワークの力、輸送船としての開南丸・しらせ比較の観点からそれぞれコメントをつけた。これを受けて、5名のパネラーによるパネル討論会に移った。パネル討論会では、地元有力紙である北國新聞社で論説委員を務める米田 満氏が討論会の進行係となってパネルをとりまとめ、パネラーとして支部メンバーである飯田 肇氏、清水克郎氏、前川公男氏のほかに長谷徹志(熊本県立大学、大場満朗地球たて周り探検隊員)氏と小幡秀治(地元在住、前羽咋市教育長)氏が参加した。

南極探検の時代と南極観測の時代の時間的な差はわずか100年であるが、その間の輸送面での変わりようは大きく、科学技

術の進歩の大きさを多くの人に印象付けた。この点についてはパネラーの何人かが現状あるいは自身が参加した南極観測船乗船経験をもとに、野村船長時代の航海の困難さを指摘した。

観測船での南極行きに関連して、野村船長時代には想像もされなかった地球規模の環境変動にかかわる諸問題、今は日本人から失われてしまったかのような「外に飛び出せ精神」、地元ですらぼんやりとなった「野村船長の偉業」、などが話題にされ、パネラーから活発な発言があった。さらに、フロアーとパネラーの間では、開南丸のエンジンの馬力数（一説に小さすぎるのではという考えがあり、広く記録に見られる18馬力説を疑う者もいる）をめぐって活発なやり取りが行われ、講演者の大賀清史氏もそれに加わって大いに盛り上がった。また、パネル討論の進行を務めた米田満氏は、白瀬 轟南極探検隊員であった釜田儀作をもう一人の石川県関係者として指摘し『「野村直吉とどのような繋がりであったか」を問うことも存外面白いことになるかも知れぬ』と指摘し、南極探検・観測に関心を寄せるものに新たな問題を投げかけた。

講演会・パネル討論会に並行して、南極OB会北陸支部メンバーが持ち寄った南極観測隊員の装備品や限定出版のアルバム等の展示、および南極OB会事務局から運び込んだ各種南極グッズの販売が行われた。

こちらのほうも、思った以上に好評で「展示会はお願いしたら、ほかの場所でもやってくれるのか？」と言う声も会場であがっていた。南極観測に関心を持ってもらう上で、こんな声は大いに大事にしなくてはなるまい。

まとめ：多くの関係者のご厚意に支えられて、北陸支部の初めての大掛かりな企画が無事終了した。図は、宣伝用に使用したポスターである。支部総会の時に提案された「野村直吉研究会発足」は、今回の行事の成功を踏まえれば可能性のある企画のように見え、大いに楽しみである。今後、地元識者を加え実現可能性を求めて広く議論を起こす必要があるだろう。そのことに関係して、地元における新たな資料の発掘や、羽咋市歴史民俗資料館が保有する野村直吉に係のある資料の精査など系統だった作業が求められよう。

謝辞：この行事を実現するに当たっては、地元の羽咋市、羽咋市教育委員会、羽咋市公民館連絡協議会、北國新聞社の温かい支援協力をいただきました。紙面を借りて厚くお礼申しあげます。また、南極OB会事務局の呼びかけで県外から（中には秋田県のような遠方から）も多数の関係者に足を運んでもらい講演会・討論会を大いに盛り上げてもらいました。感謝この上ありません。

*** 北海道支部からのお知らせ ***

しばれの街・陸別で

講演会とフェスティバル

（社）日本雪氷学会北海道支部は南極OB会北海道支部、陸別町しばれ技術開発研究所と共催（陸別町後援）で、2010年度地域講演会「しばれの街・陸別と南極観測—雪と氷が地球観測の謎を解く—」を、2月5日（土）午後北海道・陸別町で開催する。

夜は陸別町の「しばれフェスティバル」が計画されており「陸別の寒さ」を堪能することができる。

陸別町は、南極ドームふじで3035.22mまでの氷床掘削に成功した深層掘削ドリルの開発実験が行なわれたところで、しばれ技術開発研はじめ多くの人が協力した。

▽講演会

2月5日（土）午後4時30分～6時
北海道足寄郡陸別町字遠別 りくべつ

宇宙地球科学館（銀河の森天文台）ホール
講演内容

①「しばれ研との出会い」

高橋修平（北見工業大学教授）

②「しばれの街・陸別と南極観測」

渡邊興亜（元国立極地研究所長）

③「南極ドームふじコアに記録されていた地球の歴史・宇宙の歴史」

藤井理行（国立極地研究所長）

▽フェスティバル 日本最寒の祭

同日午後6時30分開会 アイスバレーン（氷の部屋）で一晩過ごす「人間耐寒テスト」が人気。

▽陸別町への行き方

札幌からはJR北海道で池田駅へ。池田発陸別行きの路線バスで。

旭川からはJR北海道で北見まで行き、北見発陸別行きの路線バスが便利。

▽当日

①講演会参加者は午後4時20分までに陸別町銀河の森天文台に集合（午後4時に旧陸別駅集合、無料バスで天文台に移動）

②講演会終了後、希望者は無料バスでしばれフェスティバル会場に移動。懇親会希望者は、午後8時半からの花火が終わった後無料バスで懇親会場に移動。午後9時頃から懇親会開始（会場はセレモ浜田。会費3000円を予定）。

③懇親会に参加しない人は、無料バスで旅館に移動。

▽旅館手続き・問い合わせ等

2月5日に陸別町に宿泊希望者は、浜田旅館（TEL：01562-7-3175）に各自で予約のこと。

フェスティバル参加者の宿泊料金は1泊朝食付きで5000円、1泊2食付は6200円。

地域講演会関係の問い合わせは、
亀田貴雄様（北見工業大学社会環境工学科、

Tel: 0157-26-9506

kameda@mail.kitami-it.ac.jp)



連載「帰国後の各隊の動き」

第27次隊帰国後の活動報告

おぎ な さ
荻無里立人（27次隊）

1985年11月14日、初代しらせの3回目の航海で私たち27次隊は晴海を出航した。夏隊とオブザーバーはシンガポール経由で翌年4月、私たち越冬隊は87年3月に、モーリシャス、ヨーロッパ経由最後の隊として帰国した。帰国後の初イベントは、しらせ帰港に合わせて、4月19日～20日に「熱海つるやホテル」で開いた解散会であった。越冬中から手塚生活主任を中心に企画部員を決めて「帰国後でなければできないこと」を目的とした。一部に「南極ボケ」が見られたが、この会で一気に完治した。

その後は、88年の忘年会（会場はその名もあか鬼）に始まり、31次から49次までの20年間は、日帰り・泊まりでまた南へ向かう人たちの壮行会を12回開催した。壮行会の合間をぬって暑気払いや忘年会、定年で一線を退く人たちの慰労会も開催した。一方、吉田隊長、佐野観測協力室長、内藤越冬隊長の退官にあたっては、その2次会を27次OB会と位置づけて集まりを持った。こうした会の参加者数は20数名から30名程度であるが、夏隊も含めてほとんどの人は参加している。

周年行事が始まったのは、出航10年を迎えた1995年からであった。この頃はまだ奇特にも昭和・あすかに行く人の壮行会を行っていた時期であったが、37次隊で参加する人はいなかったため、周年行事として単独の開催となった。壮行会の会場は、なぜかいつの時期からか神田の「越中」と決まっており、2次会は歩いて数分の「天狗」で、いつも2次会まで全員参加でセットした。壮行会が2次会セットとなった理由は簡単で、越冬中の毎月の誕生会は1次会が食堂での宴会、そして2次会がバーでのカラオケ・ビリヤードであり、これを引

き継いだものである。この 10 周年において、壮行会は都内でもよいが、周年行事は「泊まりで温泉」の希望が出され、以降周年行事は「1 泊温泉旅行」となった。

こうした経過から 2000 年の 15 周年は、冬の訓練地、乗鞍の鈴蘭小屋で開催することになった。ところが、開催を前に鈴蘭小屋でご不幸があり、急遽会場を同じ乗鞍の「グリーンウッド」に変更して行った。この頃から 27 次の行事も家族も含めた参加となり、翌日はワイン工場の見学など安曇野観光が行われた。合わせて、「周年行事の移動は基本的に電車、そして、その車内での宴会」が定番となった。

出航 20 周年は、2005 年、周到な計画のもとに 2 月に掲示板に告知があり、11 月 26 日から 27 日にかけて、秋田の佐藤さん、井上さんの協力で人気の乳頭温泉郷「鶴の湯温泉」で行われた。この時は、新幹線こまち号往路での宴会が大変な盛り上がりを見せ、車両そのものが宴会場と化してしまった。JR の乗務員からどのような指導があったかは、参加者の



出航 20 周年祝賀会(角館の武家屋敷)

記憶に鮮明に残っている。角館の武家屋敷を散策し、田沢湖では伝説の美少女たつこ姫のブロンズ像を見ることができた。到着後はセールロンダーネに 27 次で持ち込んだブルトーズを 19 年振りに見てきた志賀さんの報告会・そして、東北弁を多用した祝賀会が行われた。

帰国 20 周年は 49 次で参加する林原さんの壮行会を兼ねて、2007 年 10 月 20 日から 21 日にかけて七沢温泉「山峰荘」で行われた。小田急ロマンスカーでの宴会、そして温泉と周年行事の条件を満たすもので、朝食時のビール消費量も 10 本を超えて、昭和でのミッドウインターを思い起こす 2 日間となった。



帰国 20 周年祝賀会(七沢温泉)

そして、今年 2010 年、あの晴海から 25 年を迎えた。出航 25 周年祝賀会は 11 月 23 日～24 日にかけて箱根湯本で行われた。開宴に先立って、吉田隊長のお話、そして、内藤越冬隊長のお話があり、はじめだけは食堂棟での「全員集合」の雰囲気となった。27 次の周年行事では、参加者それぞれが各自の近況報告を行うことになっているが、こちらは内容が豊富で「久しぶりの昭和」を思い起こす盛り上がりとなった。予定の 2 時間半があつという間に経過し、場面は 2 次会へと移行した。会場となった 427 号室は、25 年前にタイムスリップし当時の話に花が咲いた。機械の担当者が多かったためか、作業工作棟での出来事を鮮明に思い出した。翌日は都合のつく人で、この春交通事故に遭い入院している木暮さんの病院を訪問し、回復の様子を直接聞くことができ、元気な様子に安心した。

ところで、27 次隊のホームページは 1997 年に開設されたものであるが、当時は壮行会のお知らせと報告、また、壮行会の際に寄せられるメッセージをガーネットスクエア（27 次で発行した基地新聞）として掲載していた。壮行会・周年行事の頃にアクセス数が増えるが、今回もこの掲示板を見て参加した人がいた。こうした媒体も隊次の活動に重要な役割を果たしており交流の場になっている。

2011 年は越冬 25 周年記念であり、会場は真清田さんの地元である「石川県の温泉地」が確定している。また、翌年は帰国 25 周年を計画している。



「新刊紹介」

池田まき子著 白瀬中尉南極探検物語 「まぼろしの大陸へ」

白瀬矗（のぶ）が「開南丸」で南極を目指したのは1910年11月29日のことでした。白瀬を含む8人の探検隊員と18人の乗組員、29頭のカラフト犬を連れての旅立ちでした。長さ30メートル、幅7メートル、204トンの木造帆船であったといいます。こんな小さな船で南極を目指すなど間違い沙汰だと取りざたされるなか、白瀬は長年の夢を実現させるべく当時は未知といわれた南極大陸を目指したのです。探検家の多くが南極点一番乗りを競った時代でした。1911年の12月にノルウェーのアムンセン隊が、1912年1月にイギリスのスコット隊が南極点に到達しています。白瀬隊は南極点に立つことはできませんでしたが、1912年1月、ロス海の棚氷上の南緯80度5分、西経156度37分に日章旗を立て、その一帯を「やま

と雪原」と命名し帰途についたのです。

この本はそのような不屈に生きた白瀬矗の幼少期から85歳で生涯を閉じるまでを描いた児童書です。著者の池田まき子さんは「一人でも多くの方に探検一筋を貫いた白瀬矗の生き方、未知の世界に挑む探検精神などを知ってほしい」と言っています。来年はその白瀬矗が「大和ゆき原」に立ってから100周年に当たります。お子様やお孫さんたちと共に白瀬矗の生涯に思いをはせてみる良い機会ではないでしょうか。

発行所は岩崎書店

(Tel: 03-3812-9131)

2010年9月30日第1刷発行。

定価1300円＋税

(福谷 博記)



会員の方々が経営するお店などの紹介

今回は、第33次、50次越冬で調理を担当された篠原洋一さんのお店を紹介いたします。店の名前は「Mirai-BAR de 南極料理人」です。横浜のJR 関内駅北口から徒歩5分。アクセス図は右側に掲載しています。横浜に行かれた折にはぜひお立ち寄り下さい。

場所は横浜市中区吉田町2-7（電話は045-326-6475です。



受賞

「秋の叙勲」(瑞宝中綬章)

星合孝男 (7 夏、8、11 冬生物、16、23
冬長、28 隊長) 極地研究所

里見 穂 (1 1 冬) 気象庁

訃報

小西 肇	2010.01.23	海上自衛隊
大内徹也	2010.04.02	8 夏、超高層
戸塚秀夫	2010.08.26	海上自衛隊
石原正男	2010.08.28	16 夏、測地
吉田治郎	2010.12.16	20,26,30 冬,38 夏 機械
小口 高	2010.12.27	1,2 夏地磁気、3 冬 地物、12 冬隊長
神田 博	2011.01.03	31 冬医療

* * * 広報委員会からのお知らせ * * *

○今回より、各隊次の帰国後の活動なども掲載していきたいと考えています。今回は 27 次隊の動向を寄せてもらいました。掲載希望の隊は原稿を作成の上、編集事務局（下記参照）までご提出下さい。

○また今回より、会員の方が経営するレストランや宿泊施設などを、あまり大きなスペースは取れませんが順次紹介していきたいと思えます。事務局では個人個人の情報を把握していませんので掲載希望の方は、店の名前、アクセス、内容、簡単なキャッチフレーズなどを添えて、編集事務局でお申し込みください。

○2010 年度の通信会費を納入していない方は OB 会事務局宛て振り込んでください。振込先は同封の通信費払い込みのお願いをご参照下さい。

○OB 会報は、これまで深瀬和巳編集長・福谷博編集部員のコンビでつづけてまいりましたが、このたび、柴田鉄治編集長・手塚正一編集部員に交代いたします。その引継ぎの余波もあって、今回の発行が遅れましたことをお詫びいたします。なお、次号からの会報について、会員のみなさまにお願いがあります。「こんな記事が読みたい」「あのひとに書いてもらったらどうか」といったご意見を、自薦他薦なんでも結構ですから、どしどしお寄せください。よろしくお願いいたします。



第 52 次隊の面々と壮行会の模様

南極 OB 会事務局 〒101-0065 東京都千代田区西神田 2-3-2 牧ビル 301

電話 : 03-5210-2252 FAX : 03-5275-1635

E-Mail Address : nankyoku-ob@mbp.nifty.com

南極 OB 会ホームページ : <http://www.jare.org/>
